齋藤倫雄＆NHK 取材班著

『激走！日本アルプス大縦断～2018　終わりなき戦い』

山々の雪が消え山里が緑色濃くなる 5 月、上信越の山でもロングタイツに短パン、5～8 リッター位の軽量バックパックを背にしたトレイルランナー達が重い足取りの登山者しり目に軽快に傍らを駆け抜けていく。今や山の世界はトレランブーム、競技人口は増加し大会も数えきれない位になっているが、その火付け役は 1993 年に始まった都岳連主催の通称「ハセツネカップ」で知られる奥多摩・日本山岳耐久レースであるに違いない。通過する 15 山の累積標高差 4582m、総距離 71.5 ㎞を 24 時間以内で完走しなければならないという苛酷なレースで、私は第 10 回大会（2002 年）を皮切りに選手として 3 回、サポート役の裏方として 3 回、当大会に参加してきた。

あの頃は重い登山靴を履いた参加者も散見され、参加申し込みも早いもの順とノンビリしたものだったが、今は大きく様相を変え競技は高速化する一方でもうプロの時代であるらしい。

サバイバルレースの苛酷さもエスカレートし、中でも群を抜いて常識外れのレースがここに紹介する「トランスジャパンアルプスレース」（以下 TJAR）である。

2 年に 1 回、8 月に開催され、スタートは日本海・魚津市早月川河口、ゴールは太平洋・静岡市大浜海岸。総距離 415 ㌔、北・中央・南のアルプス３千㍍級の山々を踏破し累積標高差 2 万 7 千㍍、登りの高さは富士山登山 7 回分、制限時間８日間で参加選手は３０名限定。しかも優勝しても賞金も賞品も出ないという異常とも云えるレースなのだが、人気は高く誰でも参加できるわけではない。まずは書類選考があり、フルマラソンを３時間２０分以内、又は１００㌔マラソンを１０時間３０分以内で完走の記録がある事、TJAR を想定した長時間（15 時間以上）行動後、標高 2 千㍍以上の場所で 4 回以上ビバーク経験がある事等細部に渡る厳しい条件をクリアーしなければならないのだ。しかもそこで合格してもOK ではなく、更に厳しいふるい落としの場の選考会が待ち構えている。そこで試されるのは走力だけでなく、書類では分からないビバーク技術、読図力、応急処置法の熟知度等の総合力が厳しくチェックされごまかしは利かない。

エントリーには、「すべての責任は、自らに帰する」という誓約書の提出を求められ、レース中は山小屋、避難小屋等での宿泊や仮眠は認められず、眠る為に許されるのはテント、ツエルトでの露営のみ、自己資金で山小屋や商店で食料を補給する事は認められるが、家族や知人からの物品の差し入れを受けるのは不可、ごみや不用品の回収を頼むのも不可、何らかの事故、トラブルが発生しても、全て自己対応するというのが原則だ。

そうした厳しい難関を経て選ばれた猛者 30 名の中で絶対王者として君臨するのが静岡市消防職員の望月将悟（40 歳）である。ここまで 4 連覇を果たし、前回（2016 年）のレースでは 4 日 23 時間 52 分の大会記録で 2 位に 7 時間半以上の差を付けて圧勝。今大会では 5 連覇がかかっているが、今回は大会記録の更新を目指さずにゴールまで水以外は完全無補給で挑戦するのだと云う。数日分の食糧は絞りに絞って軽量化したもののザックの重さは 13.4 ㎏、過去は 5 ㎏位だったので 3 倍近いハンデでの挑戦、

その結果や如何！？

大会実行委員会は「烈風に晒され追いつめられる自分、悲鳴をあげる身体、絶望的な距離感、何度も折れそうになる心」とその本質を示す。徹底的に自分を痛めつけ、意識朦朧となりながらも前へ、前へと突き進み自らの限界に挑み続ける超人達、そこには 30 人それぞれの人生があり、物語がある。彼らはなぜそこまでして走り続けるのか？　何が彼らを惹きつけるのか？「そこには嘘がないから」と著者齋藤は足掛け 9 年に渡る取材実感をそう語る。本書は主役の望月に密着しつつも、選手達の一人一人にも注目し、それぞれの熱き思いに触れていて読み応えがあり、お勧めです。この程度の装備でも鍛えられた体力と技術があればアルプス縦断は充分に可能なのだと教えられる事も少なくない。大会を支えるスタッフも平出和也、中島健郎、田中正人等錚々たるメンバーが名を連ねており、この大会の存在価値を高めています。

比べる事はおこがましいが、かって奥多摩・山岳耐久レースに出場した同好の士としても興味は尽きず、若者たちの飽くなき挑戦に熱い拍手を送りたい。

2019 年 4 月「集英社」刊　1600 円　　（ＡＫＡ）